

アートを愛する男が救った、 激レア近代建築。

文井出幸亮

銀緑館や竹田ビルなど、年々、銀座から大正・昭和初期あたりの近代建築が少しずつ消えつつあり寂しい限りだが、ここはまったくノーマークだった。しかも銀座一丁目、昭和通り沿い。「川崎ブランドデザインビルディング(旧宮脇ビル)」は1932(昭和7)年竣工、銀座に現存するビルでは最古に近い、地上3階建てのモダニズム建築。ビル所有者で、「ギャラリー MUSEE GINZA」を運営する川崎ブランドデザイン

代表の川崎力宏さんが取材に応じてくれた。「実家が大大で100年続く建設会社で、私で4代目になるんですが、東京での独立を機に、この不動産を取得しました」というから豪気な話だが、しかしなぜ若い経営者がこの建築に目をつけたのだろうか？

「いや、もともとゼネコンの家系ですから、大の新築好きで、当初は憧れの建築家・藤本壮介さん設計の高層ビルを建てる計画を検討していました。収益の問題が浮上して本当に進めていいのかなと迷い始めました。それで、解体工事が始まる1週間前というタイミングで、急遽、建設を中止しました」
これまた豪気！ソフトで落ち着いた語り口の川崎さん、実に大胆である。

「すべてを白紙に戻して、このビルをあらためて眺めてみたら、なかなかいいじゃないかと思えてきたんです。もともと、ウチは曾祖父が建築家・辰野金吾による赤レンガ館の施工に関わったことが家業の始まりで、永年その保存運動にも関わってきまして、曾祖父の声がかえったような気がして、廃墟だったビルを保存・再生し活用することに決めました」

ギャラリーでは年に1度の企画展の他、大分で深い付き合いのあった現代美術家・風倉匠の作品を常設展示。1960年代に篠原有司男や赤瀬川原平らと前衛美術集団「ネオ・タダ」のメンバーとして活動した人物である。現役では、NYで活躍する山口歴のコレクションも秀逸。色鮮やかな造形美の現代アートが古い建築にスパイスを与えている。曾祖父譲りの気風の良さとおバケンギヤルド・アートを解する遊び心を併せ持った川崎さんがいる限り、この素敵なビルはまだまだ生き永らえるはずだ。

○ MUSEE GINZA

東京都中央区銀座1-20-7 川崎ブランドデザインビルディング/803-6228、6694
図11-30 17:30 閉月火



スクラッチタイルの一種、加飾タイル外壁が印象的な外観。昭和通りに面した一部は、1934(昭和9)年頃に増築した模様。設計者は不明。撮影=深水敬介